

(原案 ラベンダーさん)

二人がやってきた動物の国「アニマール王国」は、どんなところなのか？ 二人はどうなるのかな？

「着いたナリッ」

リンは、雲の渦の向こうの緑色の光に向かって、ぴよんと飛び込んだ。私も慌てて後を追いかけて、雲の渦を飛び越える。緑色の光を抜けると、身体にまとわりつくような熱気と共に、目の前には、奥深いジャングルが視野を覆い尽くす。

バサバサバサバサバサ……、脳が揺れるほどの振動と音が両耳を突き抜くと、深緑色だった目の前が一気にピンク色に染まる。私とリンが急に飛び降りて来て驚いたフラミンゴ達が、一斉に空に向かって飛び立って行ったのだ。

ハ。パオーン、ギャンギャンギャンギャン、ガツガガガガガガガガガ、キツキツキツキツキツ、ウキイーツ、フワオーツ、グオーグツツグググググルルルル……、ピーービツビツビツビツビツピーーツ……、いろんな動物たちの鳴き声が飛び交っている。【アニマール王国】は、どうやら野生動物たちの楽園らしい。

膝元まで隠すほど青々と生い茂った草の合間から、深紅色に煌めく巨大な花びらが揺れている。

「ミグ、危ないっ！」

リンに、私の背中では物凄い勢いで引つ張られ、その勢いで私は草むらの中にバサッと倒れ込んだ。

「ミグ、この花は肉食植物イーター！その巨大な花びらでエモノを包み込んで窒息させると、根を差し込んでじっくり溶かして栄養分にするナリ！」

綺麗な花にトゲがあるのは人間界だけじゃないようだ。この【アニマール王国】に至っては、もう、トゲなんて生易しいレベルじゃないけど……。そういえば、【デスダイヤ】というところでもない毒草も、雲の王国にはあった。ここの世界の綺麗な花はひとまず用心した方がいいみたい。

「いつもありがとっ、リン」

私は、背中一面にべつとりついた葉っぱやら草やらをパンパンと二氣に手で払いながら、リンに引つ張られ立ち上がった。すると、さっきまでザワザワと樹々の枝を揺らしていた風が止み、子猫の弱々しいかすれた鳴き声のような叫び声が蔓をまいた大樹の向こうから聞こえてきた。

「や、やめてよおっ！」

大樹の幹からそと顔を出し、覗いてみると、そこには青紫色の毛に包まれたハイエナ達が子猫を取り囲み、ぐるぐると回っている光景があった。ハイエナ達はいやらしく口元からよだれを垂らしながら、ハアハと荒い息を立てながら囲んでいる。きは子どもだが、たてがみは立派に生えそろっている。

「お前は、肉食界の百獣の王と言われている獅子の顔を持ちながら、何だ？その情けない鳴き声は！」

囲んでいたハイエナ達は「一斉に空を仰ぎ遠吠えをする。

「おい、シシラーその獅子の顔は、どうせお金持ちのババに買ってもらったお面なんだろう？オレ達にも一回、被らせてくれよ」

「そのお面、剥がせないなら手伝ってやるって、さっきから親切なおレ達が言つてやつてんだろ？」

「おいつー！そっちをしつかり押さえてろ！オレ様の鋭い牙で、その獅子の顔べろーんと剥いでやるぜ！」

「痛いっ！やめてよ！お面なんかじゃないってばーやめてってばー！」

「うるさい口だ！おいつー！そのうるさい口も押えろ！」

バタバタと抵抗していた足も、すぐさまハイエナ達の足に踏みつけられ、赤い泥の中に沈んでいく。気が付くと反射的に私は、足元に落ちていた石をハイエナ達目掛けて、思いっきり放り投げていた。

キヤイーン！ バツシャーンツッ！

運動音痴の私が投げた石は、一直線にハイエナの右目に命中し、そのまま泥の水たまりの中に倒れ込んだ。今の球速、先月の体力テストのソフトボール投げの時に発揮出来たら良かったのに……。

「誰だ！バニラか？」

「何、一匹相手に寄つてたかつて囲んじやつてるのよ！群れでしか動けないアンタ達の方が情けないわよ！ハイエナじゃなくて、ハエ以下ね！」

「おーおー、これはこれは威勢のいいお嬢さん。オレ達に石を投げるってことは、オレ達の恐ろしさを全く知らないヨソ者だな……いやいや、これはこれは、見れば見るほど美味そうな肉だ。この国のありとあらゆる肉は全て食べ尽くして、そろそろ新鮮な肉の味を欲していたところに現れた大切なお客様だ。丁寧におもてなしなきゃな。その減らず口を話す舌も残さず食べて、血の一滴も残すことなくすすつてやるよ！野郎ども、お客様にオレ達の狩りの技を見せてやんな！」

ハイエナ達は瞬時に四方に飛び散ると、あつという間に等間隔に分かれ、美しい円を描いていた。

「完全に囲まれたナリ！ミグ、どうするナリ？」

私は、リンの耳元でそつとささやく。リンは、静かに頷くと私の背中にそつと身を寄せた。ハイエナ達の円は音も立てることなく、じわりじわりと大きな円から小さな円になっていく。ハイエナは、エモノの横取りするイメージが強いが、実は狩りの名人だとTVで言っていたけど、どうやら本当らしい。サファリパークで見たハイエナは、ぐつたりと寝そべっていただけだったのは、狩りをする必要がなくなったからだ。エサを貰う事を覚えたハイエナからは殺気なんでもこれっぽちも感じなかったケド、このハイエナ達は違う。鉄臭い血の匂いをぶんぶんさせて、突き刺すような眼光で睨んで来る。一瞬でも気を抜けば、一気に襲い掛かってくるのは、一目瞭然だ。ヤツらの波長の合った荒々しい鼻息が、この森の静けさをさらに際立てる。

私は、緊張のあまり呼吸をするのさえ忘れていた。

ゴクツ……。唾を飲む音が辺りを包み込む。

「逃げて……。」「赤い泥の中に埋もれていたライオンの子が、身体を起こし叫んだ瞬間、ハイエナ達はまるで、その合図を待つていたかの様に、一斉に飛び跳ねて襲い掛かってきた。

「今よ！リン！飛んで！」

私の背中に隠れていたリンは、背中中の翼を大きく広げると私を抱えたまま高く舞い上がった。

「ウギヤーツ、ウググググツ……。ウグツ……。ググググウ」



リフレインさんの作品

「めいしょう君が行く！第2話」への投稿をたくさんいただきました。ありがとうございました。こんなこと、あるかもねって感じですね(笑)  
でも、バスが来ないのはいけません。そんな時はすぐにお電話をお願いしますね！

ピカチュウさんの<sup>さくひん</sup>作品



ぶんどきさんの作品

リフレインさんの作品さくひん

勢いよく一斉に襲い掛かつてきたハイエナ達は、その勢いのまま私の足元に咲いていた肉食植物「イーター」の深紅色の花びらの中へ身体を突っ込んだ。「イーター」の深紅色の花びらは一気に広がって、ハイエナ達を一匹残らず包み込む。その包み込むスピードは凄まじく、まるで雑巾でも絞るかのように一気に搾り上げ、花びらに包まれたハイエナ達はあっという間に動かなくなった。

「行く先々でこんな危機一髪やつてたら、こちの心臓がもたないナリよ……。」

「リン様、いつもいつも有難う御座います。」

わたしはリンの細いけど力強い腕に感謝の思いを込めて思いつきり頬ずりした。ケタケタ笑うリンの声を聞きながら、その大きな翼は獅子の子の前に降り立った。

「ア、、、アリガトウ、そして、ゴメンナサイ、ボクの為に怖い思いさせちゃつて…。」

近くで見ると、その顔はますます雄々しく力強い獅子の顔であることがありありと分かる。だが、その口元にはライオンが雄叫びを上げる際、見え隠れするアノ鋭く光る牙は見られない。まだ齒が生えそろっていないのが恥ずかしいのか、口元は見せないようにと、ボソボソと喋っている。しかも、尻尾に目をやると、そこには生えていたのはライオンの尻尾ではなく、小さく丸まったウサギの尻尾だった。

「ウサギの尻尾を持つ獅子……、もしかして君は？」

リンがおおめをさらにまん丸くして尻尾を指さすと、尻尾を慌てて隠しながら観念したように口を開いた

「そう、ボクの名前はシシラ。【アニマールド王国】の一族の血を引く末っ子です……、どうせロクな噂は聞いてないでしょ。王国の恥だとか、ニセ王子だとか……、お兄ちゃんみたいに強くもないし、お姉ちゃんみたいに勇気もないボクがどうしてこんな獅子の顔してるんだろう……、そんな事、ボクが一番思ってるよ。分かってるんだよ。みんなに言われなくなつて……。」

シシどろは泥みずの水たまりに両手りようてをぶつけ、水みずしぶきを上あ

た。ウサギの尻尾を持つライオンの王子様が抱えた闇は相当深そうだ。こんな時、どんな言葉ことばを掛けてあげたらいいんだろう。王族なんて世界からは程遠い一般庶民みんなの中なか、中流階級街道一直線ちゅうりゅうかいきやうかいどういちせんで育つてきた私わたしには想像もできない世界だ。重苦しい空気くわいの中なかをシシラのすすり泣く声こえだけが響く。かける言葉ことばは私わたしの中の引き出しを全部ひっくり返しても見つからないけど、せめてハンカチだけでも差し出そうかと思つた、まさにその時ときだった。

キ  
ユ  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ウ  
ッ

投稿4コマまんが

めいきょう君が行く！

第2話

宿題もやったし、  
筆箱の中もOK！

テキストもOK！

今日は  
忘れ物ナシだぜ！  
行ってきた〜す！

んげげっ！！

投稿 4コマまんが

めいきょう君が行く!

第3話

テスト Name めいきょう

□に当てはまる数字をかきなさい

1、 $3 \times \square = 24$

A.  $\square$

**お待たせしました。**

「めいきょう<sup>くん</sup>君<sup>い</sup>が行く！」の第  
3話<sup>わ</sup>ができました！

この続き、4 コマ<sup>つづ</sup>目を<sup>め</sup>考<sup>かんが</sup>えて  
ください<sup>たの</sup>ね！ 楽<sup>たの</sup>しい作<sup>さく</sup>品<sup>ひん</sup>お待<sup>ま</sup>  
ちしていますよ！

こんな子、いないと思うけど…  
(笑)  
でも、いるかもしれないね、ハ  
ハハ



シシラのすすり泣く音と音の合間のわずかな静けさの中に、拍子抜けする音が  
 滑り込んできた。後ろをパッと振り向くとリンが、顔を真っ赤にして手でお腹を  
 押さえている。  
 「ゴ、ゴメンナサイ……。助けてもらったのに勝手に泣き始めて、何のお礼もして  
 なくつて……。お腹空いてるんですね？良かったらボクのお城に来て下さい。食べ  
 る物なら何だつてありますから、是非是非お礼をさせて下さい。こんなボクでも、  
 王族の血を継ぐ者です。【アニマールド王国】の最上級のおもてなしで、わが城に  
 ご招待させて頂きます。」

「ご招待させていただきます。」

のがよっぽど恥ずかしかったのかお城に着くまで、一言も話さなかった。

【**続**つづく】

間一髪、二人に助けられたシシラ。「アニメールド王国」の王子・シシラは  
あふた、二人に助けられたシシラ。このお話の続きは、またまたみん  
なから募集するよ。いっぱい投稿待っています！

(高橋)

さあ  
4コマ目を  
みんなで  
考えてみよう！